

第二部 パネルディスカッション —日本語教育における実践研究とは何か—

実践研究の工夫と失敗

才田いずみ（東北大学大学院文学研究科）

0. はじめに

【スライド1】

東北大学の才田でございます。よろしくお願いいたします。

私の話は単純化したのでナイーブなものになってしまうかもしれません。さきほど歴史に関わった存在であるとお話があり、急に化石にされたような気持ちになっておりますが、日本語教育学会で担当してきた研究集会での「私の工夫・私の失敗」についての歴史的な話はあまりしないかな、と思います。それよりも、実践研究とは何なのかを考えようと思いました。

1. 日本語教育研究

【スライド2】

実践研究は日本語教育の一部ですね。何のために日本語教育研究をするのかというと、さきほど奥田先生がおまとめになったところにもありますが、いろいろな考え方があります。たとえば世界平和に貢献するために日本語教育を行う、という目的もあると思います。一番手近で一番小さな日本語教育研究の目的は、それでも十分大きいと思いますが、日本語教育を質的に向上させるということだと思います。つまり、現場に還元されない研究は日本語教育研究として意味がない、と私は思っています。もちろんいろいろなタイプの研究があって、直接現場でのテクニックなどに反映されない研究もあると思いますが、日本語教育の質を上げていくということが日本語教育の全体に求められていると思います。

2. 現場を形作る諸要素

【スライド3】

研究の対象は、現場をめぐる様々な要素になると思います。どんなものかといえば、現場を形作る諸要素は学習者、教師、教材、教育内容、教授法、教室テクニックなど様々あって、これらを研究するのにいくつかのアプローチがあります。たとえば学習者を取り上げた時に、学習者の頭のなかで何が起きているのか、学習者は教室の中だけではなく教室の外でも学びますし、学習者の頭の中では教室内外で学習されたものはどういうふうな形で収まっているのかを探るといったこともあると思います。

【スライド4】

現場に関連するというと、大雑把に言って教室の外で何をしているかというのは脇に置いておいて、教室の中で学習者はどんなことをやっていて、頭の中は、どうなっているのかという学習者研究になると思います。学習者研究で現場に還元するというと、教室の中の学習者が学習活動をしている時を対象とした習得研究とか、学習ストラテジー研究など

がここに含まれると思います。

3. 現場研究は全て実践研究か

【スライド5】

しかし、現場に還元される研究は全部実践研究かという、「はいそうです」と言いたいけれど、実はそうでもないかもしれません。そこには、さっき奥田先生がおっしゃった良質の研究と、そうでない研究があると思います。

いい研究とは何かといえば、現場に還元できる研究、現場を進歩させたり、進化させたり、することができる。自分のクラス、自分の今日の授業を対象に研究するけれども、そこから得たものが、その当該現場である私の授業だけに貢献するのではなく、他の現場にも貢献するものであってほしいということです。逆に、どんな研究が現場に還元できない研究かという、それがよくない研究ということですが、研究としての工夫が足りないものは、失敗であると思います。

4. なぜ「工夫と失敗」だったのか

【スライド6】

ここで日本語教育学会の研究集会で私が担当した「私の工夫、私の失敗」が、なぜ「工夫と失敗」という名前になったのかをお話します。実はこの名前は、一時期日本語学校の関係者などから非常に評判が悪かったんですね。この研究会で発表したいと学校で申し出た時に、「なんていうところで発表するの？」と上司に聞かれて『『私の工夫、私の失敗』で発表します』という、上の人は何と思うだろうか。そういうところで発表するとは言いにくいから、「私の工夫」でいいじゃないか、「私の失敗」はない方がいいじゃないかと言われました。

けれど、成功事例よりは、失敗事例の方が、原因が探りやすいですね。すごく授業がうまくいった時に、何で成功したのか、うまく行ったのかは、具体的にはよくわからない、ということもあると思います。けれど失敗したのはなぜか、と考えた時には、いくつか思い当たる原因が考えられて、原因が探りやすい。失敗事例の方が改善策を考えやすい、ということがあります。ただし単なる失敗、つまり「やってみました、失敗しました」ではだめで、やってみたこと自体に説得力がないとまずいです。

5. 説得力を持たせるには

【スライド7】

説得力が何なのかと言いますと、説得力を持たせるにはそれは、実践というのは、個々には別々のものであってもいいですが、切り取り方によっては、学ぶべきところがある、ということになると思います。

みなさんも、他人の授業をご覧になったことがあると思います。他の人の授業を見ると、「素晴らしく上手だな」という授業もあると思いますが、「私とはここが違うな」とか「あ、こういう授業なのか」とか、いろいろ思うことがありますよね。例えば私は教師養成をやっていて、実習生の授業を見ると、何しろ実習生ですから、「なんでそんなことするのよ。わたしにやらせなさい」と言いたいところがいっぱいあって、欲求不満になります。でも、

その中でも、「ああ、下手な授業はこういうふうにとやると、こういう結果になっちゃうよね」と思うこともあれば、「絵の描き方は工夫しているな」などと感心することもあります。他の人の授業をみると、どんな授業でも、何にも役に立たなかったということはなかったと思います。どんな授業であっても学ぶところはある。模範だったり反面教師だったりしますが、学ぶところはありますね。

6. 事例に見る求められる情報

【スライド8】

実践はそれと同じで、一つ一つの実践は個別具体的で条件は全部違うんですが、違うのは当たり前で、実践についていきなり普遍的なものとして語ろうとするのはもちろん意味がない。しかし視点の置き方とか、焦点の当て方によっては、これはこの現場だけではなくて他でも共有できるものがあるって、役に立つ情報を取り出すことができると思います。それで、実践の情報を提供する側は、一般化せず、下手に「普遍的にこのようなことが言えます」と言わずに、具体的な情報を提示することがすごく大事で、そのことが説得力を持つことに大切なのではと思います。

【スライド9】

ここで、今日なぜ自分がここに呼ばれたかを考え、歴史的な経緯云々という話になります。「なんで私の工夫、私の失敗になったのか」や、その前は何をしていたのかという話はやめます。実は、3.11の震災で研究室の本が崩れ、半分以上まだ崩れたままの状態です。「工夫と失敗」の予稿集が全部埋もれているんです。それで例えば奥田先生のような、何が何件と正確に伝えることはできないのですが、歴史的にたどる作業をどうしようかと思っていたら、コンピュータの中に、「私の工夫・私の失敗」の応募書類の査読をしたときの採否結果や委員長としての通知の手紙などが入っていました。それを読み直したら、ちょっと驚いたことがありました。

不採用者に書いた通知も同様ですが、採用された研究に対してもいろいろ注文をつけていました。応募の際の提出書類に簡単に1ページ書いただけで十分に実践の様子がわからないということがあったので、予稿集の原稿提出を求めるにあたっては、委員が話し合った結果を伝えていました。それをいろいろ見直して、通知の中で何を求めているのか、ということをお話します。「その活動をデザインした動機や理由、その活動を行う前の状態がどうだったからこれをするようになったのか。つまり、『私は工夫をしました』というのは、どこをどう工夫して変えたのかを他人に分かるように書いてください」など、当たり前のことなのですが、そういう注文を採択者に対して書いていました。条件をきちんと示す、ということですね。条件とは人数だったり、時間数だったり、組織の性格だったりしますが、それらを示してください、と書いていました。

それから、「○○○を用いた授業の試み」、というのがあって、○○○とは、例えば、「アニメを用いた」とか、「ウェブ教材」、「ビデオ撮影を用いた」とか、そういうようなことでした。それまであまり世の中で使われていなかったことが一種の工夫になると思っているような応募があったんですね。しかし、「○○○を使用しました」という、新しいもの、そのもの自体の新規性に頼るというのでは不十分です。「新しものを使ってみました」では不十分で、「なぜそれを使うことになったのか、それはクラスにとってどのような意味があるの

かそこまでを述べてください」と書いていました。また、「活動プロセス」ですね。工夫したり失敗したりした活動のプロセスをわかりやすく、かつ具体的に述べてもらわないと、やはり他の現場に還元できません。

特に、活動を行って、学習者に対するフィードバックをどう行ったのかということですね。活動を考えた場合の、工夫に対する評価はどうだったのか、学習者の反応や評価はどうだったのか。「学習者はそれを大変意義があると思っている」と書いてあっても、どうして学習者はそれが意義があると思っているのか、それを掘り下げてもらわないと、学習者の評価を示したことにはならないと思います。加えて、学習者のパフォーマンス自体はどう変化したかということも知りたいことですね。

【スライド10】

課題とか問題点についても通知で指摘しました。「工夫と失敗」ですから、失敗事例の報告もあって、課題や問題点も出てくるわけですが、「課題をどう把握しているのか。また、課題や問題点と同時に、効果ということも、何からどういうことが述べられているのか、課題や問題点については、考えられる原因や理由はどういうことなんだろうか、この次同じような授業活動をするならどう改善するのか、さっき再デザインという話がありましたけれども、改善の方向性についても示してもらいたい」などと書いていました。一人の応募者にこれだけのコメントがついているわけではないんですが、何年分かの採用されたものに対するコメントを総合してみると、そういうことがありました。そういう要素が足りない研究であっても発表されていました。

7. 実践研究のプロセス

【スライド11】

今の例から実践研究のプロセスを見ますと、取り組みへの動機とか、問題の所在とか研究の目的につながることも思うのですが、その方の取り組みがどこから来ているのか、個々の実践研究AとかBとか、自身の教育観から来たり、フィールド独自の理論や、普遍的な理論など、それはいろいろなところから来ていると思いますが、その方の取り組みの動機というのがどこから来ているのか。ここで、踏まえなければならない先行研究があるならそれを踏まえることも、もちろん必要になりますよね。そして、それへの対応策の決定をどうしたのか。こういう仮説でやりますと言わなくても、仮説が潜んでいるわけですよ。問題があって、それに対してどういう取り組みをするのか、どういう対応するのか、それをすることでよくなるということでしょうから、そこには仮説が潜在していると思います。そして、取り組みの具体的なプロセスをみるということ。具体的なプロセスとはどういう方法で問題に対処するのかということなので、「方法」になるのかと思いますけれども、具体的なプロセスを述べて、そのプロセスの結果を見る。変化が起こったり、起こらなかつたり、それがプラスの方向に起こったり、マイナスの方向に起こったりするかもしれませんけれども、その結果というのが「データ」になるかと思います。そのデータを、具体的なプロセスのところに関しても評価するときに、データをどう分析し、どう考察するか。そして評価した結果、現場にどう還元するのか。ということで研究の成果と課題が示されると思います。カッコ内のところを見ると、実践研究だからということではなくて、実践とつかなくても研究はみんなこういうスタイルになっていますね。現場に根ざして現

場に還元しようとする、研究のスタイルと同じ仕組みに実はなっている、ということが、今日の私の大変単純な説、なんです。

もし『工夫と失敗』の歴史的なことにご興味ある方は、あまりいらっしゃらないのでは、と思いますが（笑）、あとで質問していただけたらと思います。

日本語教育学会でポスターセッションを導入したのは、『工夫と失敗』ではないです。日本語教育学会が3月と5月に2回総会を開いていたんですが、3月の総会には人が集まらないのでアトラクションとしてシンポジウムを開いたり、いろいろやりますよね。1998年の3月に、総会のアトラクションを私たち「工夫と失敗」を担当していた研究集会委員に考えるようにというタスクが回って来ました。そこで、テストについての講演と、テストに関するポスター発表をしたんですね。日本語教育学会ではじめてポスター発表を導入したんですが、『工夫と失敗』で導入したのではなくて、その前の3月にやってみたというのが、歴史的にあるんですが、それをひとこと申しあげます。以上でございます。（会場 拍手）